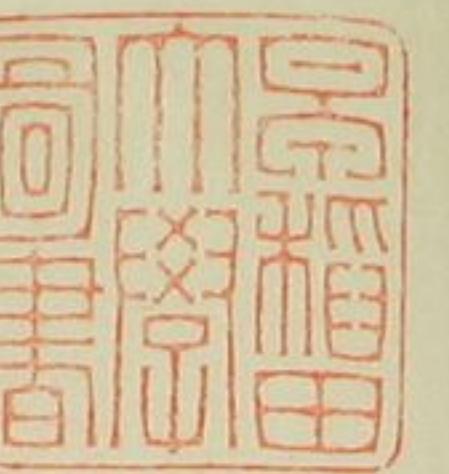


四
5



史料卷之十九

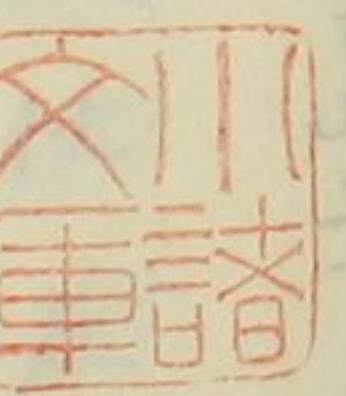
宇多天皇事記第十一上

起寛平九年正月盡四月

寛平九年丁巳

正月小

丁丑朔



三日己卯尚侍淑子施入封戶於圓成寺事

菅家文草爲尚侍藤原氏封戶施入圓成寺

願文

寛平九年正月三日

女弟子尚侍從一位藤原朝

臣敬白施入播磨國封戶五十畝右弟子依

陽成

有宿念建圓成寺後太上皇勸誘隨喜微二
發願雖出妄心一二莊嚴專由聖慮方今佛
前供養香油未飽僧房住持衣鉢猶之弟子
所賜別勅封戶准之家途旣爲衍溢是故算
數輸物先予五十烟迴向功德普及三千界
人生有很恩賞無窮死後還公是大理也女
弟子敬白按淑子卽陽成帝之姪也

七日癸未賜致仕丘大臣良世節會祿事

十九之一

台記云寛平九年正月七日宣旨云致仕丘
大臣雖承知官符未下所司宜准致仕大納
言藤原冬緒中納言在原行平等例節會之
祿依本祿法行之者

八日甲申天台座主康濟叙法橋事

天台座主記康濟下云寛平六年九月十三
日任座主同九年正月八日叙法橋

十一日丁亥除目雨儀事

西宮記除目條云南殿儀

寛平九延喜九
天曆六例雨儀

南

殿御裝束同向天皇出御諸卿着靴內侍出大臣已下昇殿着座近衛陣立階下依內裏立不警蹕

寬平稱之開南門等云

是月令中納言道真賦詩事

菅家文草賦新煙催柳色應製以陽爲韻寛平九
年何處新煙柳色粧春來數日映青陽不關鑽火初生氣應是消寒暗冶霜纖脆慙顏鉢

粉素染陶隨手麴塵黃因風次第任抽繹過
雨參差旦展張疑帶前庭餘燼燎誤薰中殿半燒香花無舞妓欲含怨枝有行人折斷腸翠黛閨眉纔畫出金絲結纏未繅持幾千里外思元亮何一城頭望武昌他日縱看遼陌上此時誰卜拂池塘不因臘後春深淺隨子柔條短也長

內宴事

又早春侍內宴同賦敵前梅花應製非紅非
紫綻春光天素從來奉玉皇羊角風猶須曉
氣鵝毛雪刺假寒粧不容粉效偷看取應叱

黃鸝戲踏傷請莫多憐梅一樹色青松竹立

花傍

按內宴式日諸書不
同說在元年正月

三善清行兒現奇驗事

扶桑略記云寬平九年丁巳春善相公第八
子法名淨藏齡至七歲志寄三寶遂辭儒林

連枝之群竊隨斗數發露之輩枕於巖泉之
流卧於松岫之雲接蹤山林栖心佈法父命
兒言欲仕三寶爲我現驗若有揭焉之驗則
當任汝本意于時正月兒童秘祈護法令折
梅華感淚潛然不制修行其後靈崛驗洞莫
不運步寄身年十二歲登壇受戒玄昭律師
爲師受三部大法諸尊別法等或居稻荷山
護法隱形採華汲水或至熊野川自然船出

未渡其河流種ニ奇異不可勝計已上本傳文

二月大丙午朔

二十日乙文德皇子惟喬親王薨事

一代要記云惟高親王四品母從四位上紀

靜子正四位下名虎女號小野宮貞觀十四

年七月出家寃平九年二月二十日薨

按本古今集目錄閑寃平九三字書及

今據伊勢物語愚見抄補之

古今集目錄云惟高親王文德天皇第一皇

子天安二年正月廿三日任太宰權師同十

一月廿五日任帥

按國史正月十六日任大
宰帥十月廿六日再任之

是依文德帝八月廿六日崩解之故貞觀十

也而本書加權字者蓋以為轉任也貞觀十

四年七月出家寃平九年二月廿日薨號小

野宮

按諸書不注行年今據文德貴錄天安元年年十四之文此時正五十四歲也

文德貴錄云天安元年四月丙戌有勅許元

品惟喬親王帶劔于時皇子年十四未加元

服十二月甲子朔第一皇子惟喬親王在御

前加元服于時年十四巾櫛等類不敢裝飾
太政大臣從一位藤原朝臣良房丘大臣從
二位源朝臣信應召參入諸近習臣等以次
侍宴自餘王臣不在預限宴樂已解琴歌繁

奏既而惟喬親王授四品十六二年春正月己酉

四品惟喬親王為大宰帥

三代實錄云天安二年十月廿六日癸丑四
品惟喬親王為大宰帥貞觀五年二月十日

癸卯四品大宰帥惟喬親王為彈正尹六年
正月十六日癸卯四品彈正尹惟喬親王為
常陸太守九年正月十二日癸丑四品守彈
正尹惟喬親王為常陸太守彈正尹如故十
四年二月廿九日己巳四品守彈正尹惟喬
親王為上野太守彈正尹如故七月十一日
己卯四品守彈正尹惟喬親王寢疾頃出家
為沙門十六年九月廿一日丙午元品惟喬

親王益封百戶勅曰朕聞丹陵至治先和族
人之心緝順能仁尚愛釋樹之影況於接萼
連跗誰不慇懃懇惻朕庶兄惟喬親王者先
清和
皇所鍾愛也朕之友于丕欲相厚自從踐祚
而還欲早增其榮笄而天準渺邈帝範凝高
以無私成名假其先人之跡以至公立德求
其後已之聲是以順流隨次朝憲頻申節欲
柳情素懷久屈常念星苑騰萃異寵章於萬

國何圖盡度落葉同歡喜於諸天骨肉天至
遂以殊跡爲疎縕素道分仍以款顏爲恨親
王讓還爵邑之日朕以親王平昔家遂省素
唯仰縣官非可不衛以爲資定於齋飭而多
妨然憚忤高情未敢處今果聞夫屢空之事
悲悵不可勝言宜全彼舊封返此百戶以
助衣鉢之賈慰朕惻然之懷中上十月十八日癸
酉元品惟喬親王上表辭封邑日去九月廿

一日勅旨賜臣百戶之封以助齋飫之資仰
承溫煦未悟比量中謝臣往年病發沈困不歸
謝簪纓於帝城約香火於釋衆菩提一念身
雖在草菴之中空觀六時心未離魏闕之下
大致臣合門萬事皆隨省折灰冷之服備避
風菜茹之食按舊家文草作食資送日若更蒙新賞
猶滿舊封水石幽閑之地有嫌於貯藏烟霞
晚暮之家無節於遊用陛下寵光不翹恩之

又恩甚深臣虛受非功過而再過惟稟伏願
階下察臣丹款照臣素情卷中綽於九重留
上腴之百戶臣願足矣臣望稱焉臣某誠惶
誠恐頓首頓首死罪死罪謹言勅答曰呈表
悉之王神涯高峙情竇太通吞北海於胷波
容東平於掌地出猥雜之世界入妙趣之法
門龕頭能藏鶴身是瘦朕異體同氣昵愛之
懷可知一株連枝策枯之期相共今之封疆

極焉。竊隘聊助斗數之法具。亦足對山之禪。
糧而王滌慮潤水窒欲巖菴代衣服以薜蘿。
當煙霞於食飲按郁氏文
集作飯頻枉野牘之詞彩。
深執澤損之謙光此非以爲榮唯表情素耳。
惟王虛心而受莫以拒之若復重辭言爲疎
朕。

菅家文草為小野親王重謝別給戶第二表
臣某言中使右近衛少將平朝臣正範至臣

草廬宣傳口勅推心出言中情自見量予辭
賈上表無聽臣葭莩屬貴磬石封高將繫觀
電於殘魂奄趨玄流於遺教王臣匪躬之義
念逾貞佛子行道之勤生何慢至彼曉
嵐蕭颯讀誦經行潤水潺湲優游自得斯則
所以陛下不咎臣入道俾成臣本願之故也
何更家蓄萬鍾空待山鬼之瞰室無懸磬長
夫野夫之聞陛下鴻慈願賜照察臣之幸矣

不亦悅乎無勝款、重累以聞臣某謹言貞
觀十六年十月十五日重謝別給封戶第三
表臣某言去月二十六日中使丘近衛少將
藤原朝臣有實至謹奉勅答宣喻愍憇淚汗
俱下中謝臣昔帶職從事之日冠蓋無非聖恩
臣今移病出家之時衣鉢皆是官施一死一
生或出或處若負恩德明神殛之臣伏案去
十月二十三日施行詔書勸督州吏掩水傷

之戶骸收拾郡民復風害之徭役自古聖帝
明王未聞無災唯在克己復禮謂之有道而
己方今如綸命之旨養臣以孔懷之親陛下
既憂國家小臣豈安寢夢嗟辱臣鄉栽松竹
寒而不可裁衣產業香花飢而不可充食然
猶庶幾于掬山梔以備租稅之逋懸肩卑野
蔬以助黎民之炊爨曷爲當此有損之年至
受無功之賞使陛下取名於私親小臣忘義

於知止繼天下譏不載于口而臣獨自不懼
于心乎伏望特賜優恕察臣愚款臣寄生者
陛下將終始於一心臣師事者世尊何屈申
於兩舌不敢諂諛恐處違勅慈悲哀愍必垂
聽許不堪固誠之至重以上表拜聞臣某誠
惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言貞觀十六
年十一月

拾芥抄云小野宮大炊御門南烏丸西惟高

親王家

古今著聞集云小野あゝ音惟高のまゝの双六
乃ちもよき法つてふり波みあゝものゝとく
てなんか／＼ま／＼る
伊勢物語えむ／＼おもきののまゝ／＼ま／＼る
／＼ま／＼る山さるのあか／＼水せぬ／＼る
雨ふあ／＼る年毎乃ぞアゼルセ／＼る
そあ／＼んむア／＼る年の時えれわま

のうこありあるくもつてふかくむしは

時よ風をひよーくならうヨウシテキ人乃名コロ
セヨリカミ神ニシテモセキソマキソアリ
セツセツセアトシカモリリキシテクシテ
カニテナムタのいえ主カシニシテカモ
説一キ本乃えふれ力セテセリセモカモ
ヨミトセカヒルアモシテ

一章

きりりる人のも。第ニ陽ニテモアレ

おもむち説乃トケラモトモアリ
ナリモ又人のガチリハセリ。機、免、免、免
ノモサシモヒヨークシテモトモ本乃え
カキモカキモカキモカキモカキモカキモ
セモアセモアセモアセモアセモアセモ
リキヌヌシシヌヌのうだほうほほほほほ

のうだほほほほほほほほほほほほほほ

の事は既にアラニヤモウハシテの如クル事
アリマセウニシテキテタリテナリトモ
ハカルツヨリ即ちんアリテスル事ハミ
モリニシカサニシモヘリハリテテスル事
ミシル事アリハシテハリテスル事
ヤハリ^{古今}セヨ一毛ヒヨモ此ノ事ニシカ
人ナカニシトモテカニモアリハリテスル事
ゆく事ニシカニモアリハリテスル事

あまうり山へとくまんとおもふ行
きぬしゆくたるんとほのとまうり大志
ゆめのうわせとあまうれ松と茶のむせと
えせ秋乃東とまのまをあくやまん
あまうれお生乃はとまをあくやまん
あまうれあまうれとまをあくやまん
あまうれおまうれとまをあくやまん
あまうれおまうれとまをあくやまん
あまうれおまうれとまをあくやまん

いえのゆゑ隠れあり、道もまくし
まほりておこぼくつゝじるもな
てねり事ひはくにじさくまくへて古び
すゑむれわちしゆくさてすまくいと
とねりておほせぬまくえまくくとア
シテヨリとてあまく、若くとまくわか
雪ゆきて君をえんとてあむなまくまく
おまく集云々ともきてひ御よまく

すこもてうるさく業平羽西雪川（シナガ）姫
ほんまくうさかとておとて松原（マツハラ）あふ
わがいよせとひそひそに惟喬親王着
きよひやねもじよせせまなまうりん種至

今也一月

和漢朗詠集嘗絃相如昔桃文君得莫使簾
中子細聽（聰）彈琴惟

高親王

大鏡裏書云承平元年九月四日夕參議實

十九之十四

賴朝臣來也誤及古事陳云文德天皇最愛
惟喬親王于時太子（清和）幼冲帝欲先暫立惟喬
親王而太子長壯時還繼洪基（中上）其時先太政
良房
大臣作太子祖父爲朝重臣帝憚未發太政
大臣憂之欲使太子辭讓是時藤原三仁善
天文諫大臣曰懸象無變事必不遂焉爰帝
召信大臣清談良久乃命以立惟喬親王之
趣信大臣奏曰太子若有罪須廢黜更不還

立若無罪亦不可立他人臣不敢奉詔帝是不悅事遂無變

文德

江談抄云天安皇帝有讓寶位于惟高親王

上

下

之志太政大臣忠仁公抱攝天下政爲第一

臣憚思不出自口之間漸經數月云或祈請于神祇又修秘法祈于佛力真濟僧正者爲小野親王祈師真雅僧都者爲東宮護持僧各專祈念互令相催云

元亨釋書慧亮傳云仁壽帝二皇子爭儲位
帝令二皇子鬪藝勝者得立兄惟喬弟惟仁
藝敵不決乃賭力士相撲於是乎惟仁有羽
林郎將善雄惟喬武衛將軍那都羅羅臂力
過善雄惟仁付亮乞法敕亮乃修大威德護
摩法惟喬又請真濟闍修密供都下皆知
二沙門加二皇子也期日二人角力那都羅
身體壯大善雄不及群臣以爲惟仁失也于

時惟仁馳使告亮亮卽執獨鉛杵鑿破頭腦投爐火而供持念須臾忽大威德尊所騎青牛大吼一聲此時宮中善雄得勝惟仁立為太子貞觀帝是也

按羅山文集云俗稱天安元年三月三日惟喬惟仁爭位按惟喬母紀名虎之女也是年既二十四歲惟仁母太政大臣藤原良房之女也三代實錄云嘉祥三年三月二十五日癸卯惟仁誕生十一月二十五日戊戌立爲皇太子于虎倭訓同而一人則柰何以惟喬之外祖父

威時誕育九箇月也是年僅八歲夫以良房之克得及乎必不可然也若夫那都羅與名虎倭訓同而一人則柰何以惟喬之外祖父

與力士爭角哉况名虎死已年久子那都羅善雄果何爲者乎匹夫之所爲豈武衛將軍羽林郎將之所爲乎亦可以疑焉此時有參議從三位中官大夫伴善男者善男善雄亦倭訓同而可二人善男鳴于朝矣名于世間說其同稱者有之乎亦可以疑焉唯訝浮屠奇俗傳演于後人者乎

平家物語云文德天皇二十一年八月廿二日

陽日壬午夜及少刻至多岐河口而水急乃

乃走之

さいまやうとゆるくか事に済のあんじよもか
内までりとくわうれまんばゆくかけ渡^ミ
え渡^ミ賢聖乃名とまくをまくぬき君かと
え渡^ミ至二のまちきの顕けを以れあつて
おれのゆすめ源殿の肩のあく^ミなり一門の
おれもくしてえてかま金持^ミかくし理^ミ又
まくせひかくゆすれ渡^ミかくさんかくくの
ま里やうゆそさんをぬされあんまく所を被^ミ

おれもくゆくてゆくもおれもゆくゆくと
一のあすか祝あうの朝王^ミの西の室^ミかよゆ
の室^ミ宿正^ミあんせいくとく一北長者^ミ法^ミ不^ミ解
れ坐^ミ也ニ乃ま^ミと祝^ミ人のあんまうけのゆりか
御社おれのゆ持^ミ祝^ミのあんまうけのゆりか
おれもくゆくゆくと^ミ御^ミ祝^ミのあんすもくく
内^ミまくゆくあん^ミまくゆくゆくと^ミ御^ミ祝^ミ

ノハシさんをあまめり あんうわんもまく
もうちえんてほつまさん す用捨ひテ
あるふにまんさん かくらひのり トモヒ
馬車のせうと運と おまわうふ おまく
室作と そと トモヒ トモヒ 議走と おぬ おほく 九月
二日の日二人共あまち 右通のち、一が 替ありあり
ニヨヨヨシケリヤ 五のくつともあひ たのを
えとひまをひの 雪乃玉くわ かきあり 星乃と

ふつとおまけ うそさとひの 猫リ 大下者
う金なれしめ日ひくととを ま金 月の 畏若
あ方小引うまをとふま まくと ほくと ほくと
ゆりのよ はる まくと 何より 速略あ もじ あんせい
僧院を東まへまんととを まくと まくと
だりの あん院小まんととて まくと まくと
まくと まくと まくと まくと まくと まくと まくと
まくと まくと まくと まくと まくと まくと まくと

少被蟲害とてかんもんをうそりおれども
生ふ十萬のあいはまれもへたてあむ一處
坐すとあらわ親王けむる後事萬能二乃ま
さとひよの親王けむる後事萬能二乃ま
節あつてそのえ、之に親王のあんこづけ
とくに引くだりしゃるの曾もさや人、力あ
らばにゆくと人をおさむる萬能二のまち
きひよの親王けむる後事萬能二の曾も
サ將とせいか

ミリ金とて片手ふあつてくまね人、西
友志志沙吉多全とてやうすてぞくとぞく
ちゆき引くとてああひかくとてくま
一ての金ふうきとてあ全てなまほつよ
まくとて、重きとて二ぢやう中華模様
もと車とて、車きとて又ほとくとい
あとほとくとて、車きとて伏んとくとい
ともふあとくとて、車きとて伏んとくとい

あらぬ事ゝ思はばる
大乃男アシタコ
あくよとあくよ
えん二乃あくよ人ヒト
執事シヨウジの沙シハりは床厦シヤクサの所シテに更カタへたのを
くもムモの毛モを仰アキラメて五重ゴヂウの金カネを
かさむ室ムロに立タチてはあらまふ
あくよせんと仰アキラメて五重ゴヂウの金カネを
たゞ此ハシは仰アキラメてうぢウヂを打ウヂて
ありまくらうとおもて仰アキラメてうぢウヂを打ウヂて
乳ルをあくよとあくよ

五
一
毛
之
十
日
月
中
大
事

徳子久親王は御也
清和の御是也

源平盛衰記云 維喬親王ハ御位力ナハサリケレハ小野ノ里ニ引糞給ケリ小野親王トハ是也又持明院トモ申ケリ山陰ノ

中納言昔ノ好ラ思出テ時々事問給ヒケ
リ

後携集云乃山也。北山也。女友者。其

許多金様のもひとあともぬうりる枝を折て
さきそのむよしきくさきありぬまほやう
惟喬親王女
けり風のをすまちうすも
なまめうもとくにそさんちのま
ゆらめくすくもゆくよもあくわく

今昔物語云今ハ昔常澄ノ安永ト云フ者
有リ此ハ惟孝ノ親王ト申ケル人ノ下家司

ナム有ケ真 安永其ノ宮ノ封戸徴ム
力爲上野ノ國行リ數然テ年月ヲ經
テ返リ上ケル美濃國不破ノ關宿ヌ而
ル間安永京ニ年若キ妻ノ有ケル月來國
ニ下ルケ時ヨ極テ不審ク思ケル合セ俄
極シ戀シ思エケ何ル事ノ有ムナラ夜明ハ
疾ク急キ行カム思テ闇屋ニ寄卧タリ程
寝八リケ夢ニ安永見ハ京ノ方ヨ火ヲ

燃ルシタ者來ル見レ童火ヲ燃テ女ヲ臭シ
リ何ナ者ノ來ナラ思フ程ニ此ノ卧屋
ノ傍ニ來タル見レ此ノ臭シタ女ハ早ウ
京ニ有ル我カ不審ト思フ妻也以此ハ何
カニ奇異ノ思フ程ニ此ノ卧山所壁ヲ
隔テ居ナ安永其ノ壁ノ穴リヨ臨テ見ハ此
ノ童我カ妻ト並ヒ居テ忽ニ鍋ヲ取寄テ
飯ヲ炊テ童ト共ニ食ノ安永此ヲ見テ思

ハ早ウ我カ妻ハ我カ元カリ間ニ此ノ童
ト夫妻成ニケ思ニ肝騒キ心動テ不安
ス思ヘト然ハ爲ニセ様ヲ見ム思テ見ニ物
食ニ畢テ後我カ妻此ノ童トニ人搔抱カ
ヒ卧メ然テ程モ無ク要安永此レ見ル惡
心忽ニ發テ其ニ踊入テ見ハ火モ元シ人
モ不見エス思フ程ニ夢覺ヌ早ウ夢也リケ
ト思フ京ニ何ル事ノ有ルニ彌ヨ不審ク

思ニ卧ルタ程ニ夜明ハ急立テ夜ヲ晝ニ
成テ京ニ返テ家ニ行タル妻恙カ无ク有
ケレ安永喜ト思ケレ妻安永ヲ見マハ咲
テ云ク昨日ノ夜ノ夢ニ此ニ不知メ童ノ
來テ我レ倡テ相具テ何クト不思メ所ニ
行シ夜ル火ヲ燃シ空ル屋ノ有シ内ニ入
テ飯ヲ炊テ童ト二人食テ後二人卧タリ
時其子俄ニ出来タ給シカ童モ我ニ騒
リテ

トク思ニ程ニ夢覺ニ然テ不審ト思ニ居リタ
ル程ニ此ク御タル云ケル聞テ安永我モ
然ニ見テ不審シ思テ夜ヲ晝ニ成シ急
来ル也ト云ハ妻モ此ク聞テ奇異ニ思
リテ

三月大丙子朔

二日丁天台座主康濟辭維摩會講師事
扶桑略記云三月二日天台座主法橋上人

位康濟維摩講師辭表云忝以非器誤膺其選雖歡而承旨信顧而懷悲康濟學謝誓古才非知新幽求之功早倦法藏悟之職何論

場加之老耄日增殘齡無幾只思讀讚於山門獻鎮護於邦家仍注不堪狀謹辭

七日午充藥師寺最勝會料米事

藥師寺最勝會表自云寬平九年勅下於內藏

藏施賜講讀師布施料生絹十八匹綿七

十九也調布三十端彼時俗別當而三條右大臣并右大辨平朝臣季長勸會料乞狀殊經奏聞即下恩勅被施入大和近江兩國各米六十解云二按施入日無所考

十九日午臨時仁王會事

菅家文草臨時仁王會咒願文國主皇帝歸命頂禮仁王般若波羅密經去年言上大享大疫近日有聞京都漸患獻情不安怖畏無

極寄言冥助歸信明神是故發願廣設大會
至心懺悔三業六根合掌歸依十方諸佛寬
平九載季春三月十有九日甲午良時自大
極殿至朱雀門一十六堂百八十僧幡蓋莊
嚴香花供養講演百座朝夕二時道俗同音
見聞隨喜心不貳心欲消疫癘念無餘念欲
濟人民既沉困者願早除愈未初病者願先
遠離一切不祥隨而消滅一切災難同亦攘

十除功德之潤專祈五穀耳雨順時夏種無滯
暴風永斷秋實全收諸國豐稔百姓富饒大
鐵圍下恒沙界中知之不知共昇覺道

百練抄云長保三年三月十日行幸八省院
被行仁王會寬平九年例也

廿三日戊供雜藥於佛僧事

管家文草奉勅雜藥供施三寶衆僧願文平
九年三月二十三日假銀壺一合納雜佛施料紅雪小

百行二百
褒僧施料弟子生在末世乃宿業也
位爲國王乃勝因也是故常念所得珍財以
用布施萬民百姓然而志申力屈言深事淺
唯願和合一二劑上妙香普及千萬億苦衆
生今之所捨在此上於三寶衆僧垂哀聽許
弟子敬白

四月小丙午朔

十日乙卯令科決被差賀茂祭騎兵致拒捍者事

十九之廿六

類聚三代祐云太政官符應科決被差賀茂
祭騎兵致拒捍土浪人事右得山城國解僕
管八箇郡司解僕件祭騎兵擇土浪人堪事
者差進旣畢而寄事高家不順國仰若不言
上恐有後責仍注拒捍人交名申送者國檢
案內承引之輩不及廿人俾列之儀當到闕
急望請官裁如此之類不限土浪不論褒貶
行齋之外决落五十以懲將來者中納言兼

右近衛大將從三位行春官大夫藤原朝臣

時平宜可贖之免國司先勘具過依法責贖
自餘依請寛平九年四月十日

十九日甲子定拘放諸國任用吏解由例事
類聚三代格云太政官符應立拘放諸國任
用吏解由例事右勘解由使奏狀偁謹檢太
政官去寛平七年七月十一日符偁諸國任
用之吏被申不與解由狀唯令載其預事及

身犯但至犯用官物則一人有犯餘官同坐
仍如格式者又去年九月五日符偁得駿河
國解偁今如官符任用之吏非有預事及身
犯者皆可與解由至于未納官稻損敗財物
可負官長一人望請前後未辦濟事依新制
而可免多少交替欠物存舊典以不改謹請
官裁者良世大臣宣奉勅依請諸國准此者謹
案交替式致調庸雜米未進燒亡官物官舍

留仗破損者奪國守已下公廨調庸廳惡違
期者亦長官已下節級致坐然則除預事身
犯一人有犯餘官同坐填交替欠差分之外
猶有此累載式之事或存或停至于拘放當
致疑殆又貞觀十四年七月廿九日格云所
欠之物相共填納所坐之罪獨科其身者而
新格云一人有犯餘官同坐仍如格式者交
替式與貞觀格其趣是殊而介如格式當有

一足若爲處分者同宣奉勅前後之格指揮
不同雖多變改未究情實何則雖延曆立犯
用餘官同坐之格及貞觀有欠物共填罪科
犯人之符至于寬平七年不詳弛張之由更
引延曆之符今須復貞觀格行之不可依寬
平符坐之加以出舉收納計帳朝集之政非
獨長官之所行皆遣僚下示頭巡檢租稅雜
米官舍驛家之類不是受領之自爲各差任

用爲之專當粗舉大綱自餘可知然則一爲
專當之官一預不顧之務四度公文難避失
錯一國雜怠豈得免脫况乎在任之日既得
公廨秩滿之時何許負累而寬平七年苟唯
舉預事與身犯同八年格偏指交替之欠負
調庸雜米未立其制爲政之道理不合然今
須若申不與解由狀者注載雜怠勘留公廨
下
上一如前例若與解由者唯令所司勘申奉使

十九之廿九

專當之怠何則與解由時尋其闕怠勘沒公
廨徵用私物至于不取返抄不動公文則怠
在長官責非任用故也立此一例以明爻領
任用之別寬平九年四月十九日

定諸國司辨濟前司雜怠條例事

政事要略云太政官符南海道諸國司應立
令後司辨濟前司時雜怠條例事一國之二
寺神社官舍驛家池堰戎具器仗條右勘解

由使奏狀傳諱檢仁和四年七月廿三日拾
傳得大宰大貳從四位上藤原朝臣保則解
偁管內諸國調庸未進租稅未納及所司勘
出種雜急觸類繁多前司交付之日後司
具注不與解由狀言上勘解由使勘判云前
司後任相共辦濟待了放還者而諸國凋殘
百姓衰弊當時諸務尚難營辦往年雜急何
暇究成望請諸國司若有任中雜務辦濟无

闕者特寬以往之急勿令拘絆其身者右大
臣宜奉勅依請自餘諸國亦宜准此者今謹
案交替式云勘解由使起請偁弘仁四年九
月廿三日騰勅符偁諸國官舍正倉器仗等
隨破修理各立條制交替之日檢校破損載
不與解由狀言上舊人者緣无其勢不堪修
造新司有稱非已急卒而不顧稍經年月彌
致大損自今以後交替之日所有破損宜令

後任早加修造其料者作差割留前司主典
已上公廨充之如无公廨者徵用私物者望
請中破以上隨格徵料少損之色後任以倘
修理者又同式云勘解由使起請稱諸國驛
家例多破損國郡怠慢曾不修理自今以後
如有損失前人造了然後放還者檢諸國不
與解由狀甲時破損乙時不作至於丙丁猶
稱前損是則不立程限之所為也望請前司

修造不改前格新吏催督更施新制仍須言
上不與解由狀之後若不令任中造了者得
替之日拘留解由者如此式者前司之所急
後任必可濟而據仁和格件式停廢今檢諸
國言上不與前司解由狀官舍驛家器仗戎
具破損无實之色多少雖殊无國不有允仁
和格出之後官物失者衆矣何者無實者抱
負前司无煩後任破損者无所轉付誰能辦

濟如此之事若爲處分者中納言兼右近衛
大將從三位行春官大夫藤原朝臣時平宣
奉勅前件難怠載不與前司解由狀言上厥
後舊人无勢修理新司弃而不顧彼此不勤
誰能濟事仍承和八年十月十九日頻下嚴
制甲時破損乙時不修拘其解由以懲將來
然而徒有科責之名曾无辨濟之實何則弘
仁格稱中破以上前司輸料後任修理承和

符稱前司破損後吏修理後任依格徵料
前司曾无填進既无料物何以修理今須言
上不與解由狀後新司具注支度申請正稅
若无正稅不動穀者省除不急之例用修造
有要之官舍不得暫延以致倍損莫必待不
與狀之對徵官物之日限縱新司修理辨濟
無闕若前司不輸料物猶拘解由寬平九年、

四月十九日

史料卷之十九

